

8 三遠南信地域住民セッション 要旨

San-En-Nanshin Summit 2011 in Ensyu

■開会

NPO 法人地域づくりサポートネット 高木敦子副理事長の司会により住民セッションが始まった。

■開催地あいさつ

NPO 法人三遠南信アミ 松田不秋理事長より、三遠南信サミット住民セッションの開催に際して、住民団体が集まって議論できる場ができたことを喜ばしく思っている。長らく活動してきたが、次なる世代につなげていきたいと述べた。

■住民セッションの経緯

NPO 法人地域づくりサポートネット 田中孝治副会長より、今までの経緯を説明した。流域圏と交通圏が大きな圏域。連携ビジョンの将来像を議論しようと、サミットが回を重ねた。2005 年に流域圏や交通圏を考えると、行政や企業もあるが、住民も大きな担い手。住民の参加があるべきと、住民セッションが加わるようになった。行政、企業、住民の三位一体で進めることになった。

今回から三巡目に入った。この中で、連携の具体的なあり方、具体的な形をどのように作るかの段階に入った。理念については同意が得られた。自立していくために、どうしていけばいいかの提案を組んでいく。三巡目には、それぞれに分かれて、解決策がすぐに出るわけではないと思うが、活発な議論をよろしく願いたい。

●住民セッション（1巡目） 2005～2007年

経緯：三遠南信道の活用を産官民が一体で取り組むため「住民セッション」の設置
目標：住民セッションにおいて住民団体の活動を知り合う、プラットフォームを提唱
内容：3圏域での交流やそれを目指す住民団体が活動報告・紹介

●住民セッション（2巡目） 2008年～2010年

目標：プラットフォームについて話し合う（圏域ごとのプラットフォームの構築）
内容：1～2巡では、団体の活動や課題を把握し、事業の仲間をつくる
三遠南信地域連携ビジョンの普及

<エリア別プラットフォームができあがる>

- 東三河：東三河市民団体連携委員会
- 南信州：南信州交流の輪
- 遠州：遠州市民プラットフォーム（再構築が必要）

サミット用の組織に
なっている！？
求心力の低下

●住民セッション（3巡目） 2011年～

○目的

- ・住民セッションは、連携事業の進捗を報告、新たな連携事業を提案する
- ・サミット分科会は、行政や経済界にも報告と連携・協働を提案する

○目標：個別の連携事業を目に見える形で展開していく

⇒三遠南信市民連携のプラットフォームの形成となる

<遠州からの呼びかけ>

- ・ゆるやかな連携 ⇒ 団体が自立できるための事業（融合）：プラットフォームイメージ 組織づくりより具体的な事業を提案し実行する“場”
- ・自立して活動を継続する ⇒ 「市民レベルの社会的事業ソーシャルビジネス」を創る

●2011年遠州の住民セッションの方法

“この指とまれ！”形式の市民ビジネスのプレゼン&活動マッチング

脱：活動を知り合う
↓
実利のある連携事業をつくる

■目的の共有化

NPO 法人地域づくりサポートネット 山内秀彦代表理事より説明。昨年飯田でのサミットにて、プラットホームの連絡会が必要であるという意見がでた。前回（3年前）遠州の会議の中で、プラットホームの組織は何をやるかが問題だという話になった。三遠南信道路、新東名などインフラが開通（一部）する節目の時ということもあり、具体的な目標を掲げながら、連携するプロジェクト一つひとつを立ち上げ、それらがプラットホームとなり、進めていくべきではないかと考える。

そのため、「社会的事業を起こす」ローカル商社のようなプラットホームを考える。

■住民セッション3巡目・3年間のプロジェクト提案

連携を形にして活動資金を稼ぎながら自立・継続することを主眼に置いて連携プロジェクトを進めます。3年間（3巡目）のサミットでは、そのプロジェクトの進捗状況の確認や次なる目標を定め、新たなプロジェクトの提案を行います。

1つひとつのプロジェクトを推進する場がプラットホームということになります。

ローカル商社（仮称）プロジェクト

市民レベルの社会的事業（ソーシャルビジネス）の連携により、各地域・各団体の活性化を図ります。

① 物産の物流と地域商品づくり（地産他消）

- ・圏域の製品の共同販売
- ・小ロットの物流システム
- ・地縁店のネットワーク形成
- ・都市住民にも受け入れられるマーケティング研究

② 着地型観光（歴史観光まちづくり）

- ・歴史文化や自然を楽しむエコツーリズム、都市農村交流グリーンツーリズムの実施による着地型観光の連携
- ※南信州では、前回サミット以降、歴史文化・自然の学びのプログラム（フィールド学習）を連続開催しています。

③ 情報交流

- ・メーリングリスト、ブログ、フェイスブックなどのIT活用による情報受発信
- ・情報誌（協賛店クーポン付きなど）の制作・発行

■グループディスカッション

提案をもとに、3つのグループに分かれて参加者と意見交換を行った。

■Aグループ

地産他消連携（物産・物流・地域商品づくり）

ファシリテーター

NPO 法人地域づくりサポートネット

高木 敦子 氏

「地産他消連携提案」

NPO 法人三遠南信アミ 中野 真 氏

モノでつなぐ仕組みや山のモノを都会へ出す仕組みとして、軽トラ、地産他消のスーパーをつくる。中心市街地で圏域のモノをPRできる場（アンテナショップ）をつくる。三丁歩の米等をつくり、都会で売るなどが提案された。

「売木村の取り組み紹介」

ネットワークうるぎ 後藤 由行 氏

山あいの“加工力”を発信するとして、魅力的な加工、都会の材を山で加工する。売木村のみょうが、甘酢など。クルミは高級なお菓子、寿司に入っている。当たり前のようにクルミを使っている。売木村はみょうがで有名。商品名もある。これら発信していく。

「中山間地域における生産現場の声」

天龍村柚餅子生産者組合 関 京子 氏

柚餅子（ゆべし）とは、天公鬼＝冬まつり。自力家族の応援がないと商売は大変。柚餅子は武士の携帯食であった。次世代へ伝えるための資源が食品となった。食べて感動する“食”がある。食にするためのノウハウ（手続きほか）があるといい。

生産現場はお金がない。若い人も来る補助金が必要。クライנגアルテンに住んで協

力してもらう。宿泊＋農で若い人が定着させる。「年間7日の労力で米1俵をプレゼントということをやった。育て隊」と称して、年間7日手伝ってもらう。冬に雇用できることを模索中。

名古屋豊橋へのPRとして中日新聞で宣伝。

■意見交換

・山間部を主役にしたい。やる気と自信を持ってほしい。若い世代につなげていく。

・2027年にリニア中央新幹線飯田新駅ができると交通の流れが変わる。災害によりトンネルが通行止めになった。そのためにも「道」は重要。しかし、現在道路など3県の情報が入らない。したがって、静岡・愛知・長野の連携が必要。

・都会の人を呼び込む仕組みとして、食と物語を売っていると人がやってくる。祭りの食文化を客に出す。特産と食べ方を紹介する。景色と食の発信などという意見が出された。

・地域の人が残る仕組みとして、嫁が外へ出られるようにすべき。家庭と畑を守るための仕事を確保して都会の人が住むなどという意見が出された。

・一品ではなく、米と紅茶セットで販売する。

・高遠地区は、果樹生産地であり、台風で被害があり、果物の加工をしてみた。阿南町のみょうがを静鉄ストアで販売した。スーパーマーケットと地域が集まる場をつくることなどが議論された。

・今後は、三遠南信地域で地域の産物だけでなく、来てもらうために地域、人を売っ

ていき、地産他消による流通や販売のネットワークづくりに取り組んでいくことを話し合った。



■ Bグループ 歴史文化の観光交流・エコツーリズム連携

ファシリテーター
NPO 地域づくりサポートネット
山内 秀彦 氏

「歴史観光のまちづくり提案」 NPO 法人奥浜名湖観光まちづくりねっと 三宅 淳子 氏

奥浜名湖観光まちづくりネットの概要を紹介した。その中で、「食と旅の文化」を楽しく発信する活動を紹介した。

三遠南信地域の資源を活かして、地域が主体となって着地型観光を進めたい。魅力ある地域づくりに取り組み「観光まちづくり」の活動として取り組むことを提案した。その中で、観光交流をテーマとするコミュニティビジネスの事例を紹介し、自立して活動できる仕組みづくりに対して提案された。

今回は、売木村でプロジェクト会議を持ちたいと考えている。三遠南信は、人や地域をつなげることができていない。地域の取り組みも発信できていない。集まった人が満足できることや、連携のメリットが見えることが重要である。

「秋葉街道による連携と南信州の取組み」

秋葉街道信遠ネットワーク

木下 利春 氏

秋葉街道信遠ネットワークの活動を紹介した。まちが栄えるために、秋葉山への道でつながって連携活動をしている。みんなで共有できる人材が必要で、ネットワークもサポートも必要と思う。秋葉街道信遠ネットワークでは、月1回行政と民間と会議を持っている。

現在、秋葉街道の沿線でマップを作り、焼酎を作って販売している。モノで通じることも必要。地域の人が販売のために動き、情報発信する。

南信州では、5つのテーマによる情報誌「ここが楽しい事典」を発行している。これは魅力あるお勧めのスポットをつくることを目指して発行している。観光だけでなく、文化・福祉・暮らしなどの紹介もしており、福祉が入ることで大切なものが見直された。薬草の会、桜名人などもある。これらの冊子は、団体等から負担金をとって制作していく。この取組みも三遠南信地域全体に広げていけたらと考えている。「(社)南信州ここだに」を設立する予定。

■ 意見交換

・新城では、案内人養成や軽トラ市を開催している。もともと塩の道で馬が活躍し、賑わった。軽トラ市は、馬を「軽トラ」に変えて商品を運び、販売している。このように昔栄えた歴史をもう一度復活させることを考えている。

・音楽に関わる仕事をしており、地域の祭りに女性が参加して家族総出により祭りが賑やかになっている。女性の参加が大切。

新野高原では、クライנגアルテン(20棟)を作ることになり、ゆとりの時間を農村で自然や文化とふれあう場を提供している。

農業体験をできることが大切である。

・豊橋で観光ボランティアをやっている。豊橋の情報発信ができていない。街道の魅力を観光に活かしていくことが大切である。

・三遠南信地域を学ぶ会では、南信州で勉強会を重ねている。南信州、三河、遠州が1つになって活動するべきである。

・田原市では、どんぶり街道と称して、食による連携を進めている。各地の食材をどんぶりで紹介し、地域活性化につなげる活動を三遠南信に広げて行けたらよい。

・合併によって行政の関与を見直す動きがでている。観光協会はその影響を受けている。地域文化の伝承が合併によって失われている。ただし、地域が自立していくためには、住民意識を高めることが必要。

・東栄町のNPOてほへは、和太鼓集団でIターンの若い人たちが構成し、地域に根をはって活動している。住んでいる人の心が豊かになることが一番である。



■ Cグループ 市民連携の情報交流

ファシリテーター

愛知大学 平川 雄一 氏

「ブログによる情報発信」

NPO 法人三遠南信アミ 水島 加寿代氏

住民セッション用のブログを立ち上げた。当日は、参加者から出た意見などをタイムリーにブログ「三遠南信LOVE」で紹介。



<http://sanennanshinlove.hamazo.tv/>

情報チームに加わった団体などのHPやブログなどのリンクを貼り、携帯から情報をアップする方法などを紹介。その場で、このブログに投稿する人もいた。

「紙媒体の情報提供」

みらい企画 矢澤 律子 氏

紙媒体の動きを紹介した。南信州交流の輪が発足した。会員のプロフィールをまとめた。

すると会員同士の交流がスタート。

現在、直接出かけて、研鑽する活動を始めている。何がわかってきたかという、あいまいだったものが明確になりつつある。顔の見える事業を、1人ひとりの観点でとらえられたことが収穫。

その延長線上で提案したいのが、三遠南信全域に広げること。そうすればどんどん変わっていくはず。「知る人しか知らない」日本のどまん中。伝統芸能の宝庫である。

植物の集まり、全国の60%の植物が存在する。

日本の歴史上、秘境駅の魅力、ポテンシャルが意外に一般の人にわかっていない。この三遠南信の1人ひとりがまず知ることが、会員同士の交流と同じように、子供からお年寄りまで、この地域の素晴らしさを知ることが第一歩ではないか。

それから次の活動を起こしていくことが大事ではないか。フリーペーパーがあるけれども、その追跡がされていない。そこで、冊子の提案をする。5シリーズのテキストを作る。店、事業、文化、などを一般向けに冊子を作る。そのものが何をやっているかを明確化する。そして読んだ読者が評価をつけられる形にする。

「SNSを使った情報交換」

i. Dinfo & Company 今泉 隆 氏

SNSを使った情報交換が提案された。常に恒常的に交流ができるものが必要だが、地理的、時間的な制約を超える必要がある。それにはSNSがぴったりではないか。実験サイトにグループを設定。今の段階では、メンバーの公表はしていないが、それらを核にして伸ばしていければと考える。三地区で運営していけたらと思う。存在のある状態。個人アカウントで広げていくことができる。

グループ機能もできた。フェイスブック

ページに情報を公開していくものと機能の違いがある。それらを提案してはどうか。アカウントがなくても、インターネットにつながる人なら閲覧することができる。より広範に見てもらえることができるのではないか。ブログやツイッターで追加していくことができそうである。

「映像の発信」

NPO 法人志多ら 映像担当

奥三河の人にスポットをあてて制作。15分番組をつくって、てほへ(志多らの応援団体)のHPで紹介。ケーブルテレビにより豊橋、豊川でみられる。それらを遠州や南信州で見ることができる。それらをつないでいくと面白いと思う。

■意見交換

・NPOの中間支援をしているが、遠州では他の人と手を結ぶ意識が薄まっている。三遠南信と連携している時に、後ろ向きの浜松市民をいかに取り込んでいくか。輸送機器、楽器の地域が、自分の本業が落ち込んでいくと、法人格をとったのに、法人格的動きができないものもある。その人たちを巻き込むことで情報が上がってくるし、活用するヒントが出てくるのではないか。どうやって浜松市民をまきこんでいったらいいかな、と思う。市民協働センターが果たす役割とは何かを問い続けている。



・南信州に住んでいながら、現地に行っていない。そこで何が行われているか、関心もない。売木村での田植え体験をした。つみくさの料理を食べた。南信州の高齢化、祭の継続の難しさ。呼び込む力がうすい。しかし物語がある。物語をつくって売る必要がある。山間地の困っていること。ここに呼び寄せる知恵があるのではないか。

・地方を再認識。地域の活性化の情報を利用していく経営力が落ちている。経営、事業は情報を分析して、考えていくと、何かが掴めるはず。中心部が沈滞してしまったのが、収集はできても、分析して、行動することができない。

・フェイスブックやブログなどで情報発信していこう。それらの手法は、顔と顔が見える。知り合いの関係ができてからは、円滑な情報交換を深めることができる。輪の外の人にどう興味をもってもらうのが、輪を広げていく課題になるのではないか。

小学生の家庭教育学級があり、年に1回、研修で出かけて、子供たちに教育する上で、母親が学んでいく。最近山の中で体験プログラムなどもあるので、そこにつなげていくのもいいのかも。

・個別に学校教育の中へ体験学習をもっとやってもらいたい。子供たちの経験が少ない。

・浜松出身だが、南信州に出掛けることがない。パンフレットの良さ。連携の難しさ。三遠南信のポータルサイト。るるぶなどのツアーの紹介。個々の紹介とともに、ツアーコースなども考えていけるのではないか。

・DVDの整理をしていて、三遠南信エリアには素晴らしい芸能がたくさんあることを

知った。興味ある人たちに広めていきたい。三遠南信の言葉を初めて知った。いろいろな地域が連携しているんだと思った。

情報発信の情報がありふれていて、選択するのが難しい。その中で、これからは情報をいかに相手に伝えていくかが大事。それにはインパクト。固いような名前とか、いままで形式にとらわれていたことではなく、香川でもやっていたが、香川は名称をかえて、「うどん県」にするとか、ユーモアのあるものが三遠南信地域で発信しても武器になるのではないか。

・情報（冊子）は目的別にわかれていると面白い。冊子作りを、どう進めていくか。東三河では、「どすごいネット」を行政がやっている。登録したい人は自主的に登録する形。それらの情報などを活かしながら、人づてにいくと、情報が偏っていくと思うので、ネット上にのせていくことも必要で、更新していくことが大切だと思う。

・鳳来と引佐がつながっていない。三河にいと、引佐の情報が伝わってこない。道がつながっているのに情報がつながっていない。チラシなどが県境を越えて置いていない。その人たちの意識。情報をつなげようという意識がない。情報は使う人の意識を高めないといけない。

・三遠南信は、いいところだが、道が悪い。対応ができない、そうした現実を売れるもの、全体をどのように商品化するかをみんなでき取り組まないといけない。「三遠南信」ってなあに。それが伝わっていないのが現実。意気込みや文化は発信できない。お金を生み出していきたい。そのためにどうするか。

■グループミーティング報告

Aグループ 「地産他消連携」の報告



各地で地産地消を進めている人たちが三遠南信で連携し、山のものを都会で売っていく仕組みづくりの意見が交わされた。具体的に顔の見える物産・地域・人を売っていくネットワークの仲間づくりに取り組むことになった。

Bグループ

「歴史文化の観光交流・エコツーリズム連携」の報告



事業の企画には至らず、まだまだ活動紹介のレベルの議論であった。しかし、三遠南信でグリーンツーリズムを展開していくための議論をした。

サミット終了後に「着地型観光」の連携のため、具体的な話し合いをする会合を開くことが提案された。とにかくまず動こう！ということであった。

Cグループ 「市民連携の情報交流」報告



情報チームでは、まずは「冊子」を作り出すことを決定した。また、南信州の「交流の輪」の冊子などをベースに、矢澤さんが描いた土台冊子を基盤にして、三河と遠州の協力者を募り、進めていく。

■総括

以上、3つのプロジェクトをやりたい人がこの指とまれ方式で集まって進めていく。その取り組みを三遠南信全体で情報の共有化を図り、プラットフォームの構築に向けた検討に入ることを確認した。今後のサミットでは、各プロジェクトの進捗を報告し、新たな提案をしていく場としていくことを確認した。

最後に次回開催地の東三河を代表し、東三河市民連携委員会の原田委員長が締めめのあいさつを行った。サミット当日だけでなく、事前の話し合いを重ねながら進めていくことが必要であると述べた。

